「体育会系調理補助」

山田えみこ

人物

白河　典子（25／35）調理補助パート
澤田　裕也（40）店長、調理師
植木　トヨ（71）調理補助パート
大岡　エツ（63）調理補助パート
村田　恵一（67）調理師
古岡　竜（40）精神科医
白河　圭吾（67）典子の父
白河　信子（65）典子の母
森川　美津子（42）栄養士兼事務員
鬼塚　浩（35）介護士
患者
掃除婦
病院の院長（67）
介護士A，B
消防士A，B

○雑居ビル・中（夜）

火事。

そこら辺中が、煙と炎に包まれている。

消防車のサイレンが鳴り響く。

逃げ惑う白河典子（２５）。

瓦礫が次々と倒れてきて、典子は、それに驚いて飛びのく。必死に逃げるが、出口が見つからない。

瓦礫が、典子の行方を塞ぐ。

バラバラと倒れた瓦礫の向こうに典子の姿が見えなくなり、炎が一帯を包む。

典子「助けてー‼」

典子、瓦礫の山に埋もれてしまう。

パタパタと、物が崩れる。

典子「（モノローグ）誰も助けに来てくれなかった……」

瓦礫の下で、典子は気を失う。

○白河家・外観（朝）

タイトル「半年後」

門の表札に「白河」

○同・典子の部屋・中（朝）

６畳ほどの洋間。勉強机と椅子、ドレッサー、そして、頭に包帯を巻いた典子が眠っているベッドがある。

突然、紙に包まれた石が窓の外から投げ入れられる。

（ガシャーン！）

窓ガラスが割れ、じゅうたんの上に石が転がる。

寝ていた典子が、起き上がって、包みを開けると、こう書いてある。

（ひとりで、生き残るな！）

典子は、手をわなわなと震わせ、ベッドに突っ伏す。

○東脳外科病院・外観（朝）

タイトル「１０年後」

中規模の病院がたたずんでいる。

○同・厨房・中（朝）

澤田裕也（４０）の割烹着を着たお尻が大写しでふりふりと振られている。白い帽子。顎のところにずらしたマスク．緑のエプロン。白いズボン、白いズック。

澤田「ふんふんふん（ハミング）」

４０畳ほどの厨房。

白河典子（３５）が、澤田を呆気に取られて眺めている。

典子、両手に薄い青いビニールの調理用手袋。

左手には小鉢を持ち、右手にはお惣菜をつかんで持ったまま。割烹着その他は澤田と同じだが、マスクはちゃんとしている。

典子の前には、作業台に小鉢がトレーに９個ずつ７段あって盛り付け作業の真っ最中。

典子「澤田店長……」

澤田、振り向かないままで　典子の視線に気が付き、ピタッと作業の手を止め、やおら振り返る。コミカルな表情で、ちょっと照れたように、顔を真っ赤にし、

澤田「白河さん！まじめに仕事してますか⁉ちゃんとやってね！」

典子「はい！」

典子は、あたふたと作業に戻る。小鉢をひとつひっくり返し、なかのお惣菜をぶちまける。

○同・調理部控室・中（朝）

壁の時計は、９時 35 分を指している。植木トヨ（７１）と、大岡エツ（６３）が、割烹着に着替えながら、話している。

エツ「今度の子、白河典子さんだっけ？ちょっと変わってますね、トヨ先輩」

トヨ「そうね、なんにも自分のこと話さない

わ」
エツ「今まで、就職もせずに何やってたのかしら」
トヨ「やめな、詮索は。人間、生きてりゃ、色々あるもんさ」
エツ「それにしても、赤ちゃんみたいに素直な子で」
トヨ「素直な子は扱いやすい。仕事が続けばいいけどね。皆、辞めちゃうから、この業界は……」
エツ、壁の時計を見やる。
９時４０分。
エツ「トヨさん、もう時間です！」
トヨ「はいよ！エッちゃん！今日も頑張っていくよ‼」
トヨ、緑色のエプロンの腰ひもを巻き、腹をパンパン！と叩く。
トヨ、エツ、控室を出ていく。

○同・調理部廊下・（朝）

業務用ロッカーが１０個ほど並んでいる廊下。
村田恵一（６７）が、ユニホーム姿にローラーをかけている。
そこへ、控室からトヨとエツがやってくる。
トヨ、エツ「ムラちゃん、おはよう！」
村田「おう！」
村田は、一心にローラーをかけている。
エツ「ムラさん、今度入った子、どう思います？」
村田「んー？どうも、こうも……」
ローラーをかけながら、
村田「暗いねー、どうも表情が……あれは、いかんいかん」
エツ「だよねー」
村田「トヨさんは、どう思うんだい？」
トヨ「私かい？私はあの子イケると思うよ？とにかく、素直で誠実だ」
村田「トヨさんは、高くかってるねー」

トヨ「まぁ、そのうち、緊張もほぐれるだろうよ。わたしたちは、わたしたちで、ちゃんとほぐしてあげよう」
村田「さぁ！いこうか‼」
トヨ「おう！」
トヨ、村田、エツ、厨房に入っていく。

○古岡メンタルクリニック・外観
中規模の雑居ビルの一階に「古岡メンタルクリニック」と窓に書かれている。
その下には「心療内科」とも。

○同・診察室・中
古岡竜（４０）が、診察室の机に向かって座っている。机には、デスクトップコンピューター。
その斜め横には、典子がじっと座っていて、コンピューターを眺めている。
古岡が、口を開く。
古岡「あれから、１０年ですね？」

典子のほうへ、振り返り、古岡は脚を組む。

古岡「どうですか？あれから、何か気になることはありますか？」

典子、首をかしげながら、

典子「特に……、どうということはないんですが……」

古岡「……が？」

典子「もう、１０年もわたしは皆から遅れている、それが気になって……」

古岡「あなたは、あの火事でPTSDを発症してしまいましたからね」

古岡、カルテに何か書きながら、続けていう。

古岡「気にする必要はないです。皆、誰だってスタートが遅れたり、障害に見舞われたり、色々あるんですから」

典子は、ためらいながらもうなずく。

古岡「それに、あなたはあんな酷い火事に巻き込まれても、奇跡的に無傷だったんです

よ。たった一人で……あれこれ言う人もありましたが」
典子「はい」
古岡「あの火事で亡くなった方々の分も、幸せに、幸せに生きる権利はあるんです。しっかりして」
典子、古岡をじーっと見つめる。
古岡「パートのほうも、週２日、４時間までなら、大丈夫ですよ、やっていいです」
古岡、じーっと典子を見つめ、
古岡「大丈夫です。あなたなら」
重々しく言う。
典子、表情が明るくなる。子供のような笑顔。
古岡「じゃあ、もう一度聞きます。炎は見て大丈夫ですか？」
典子の視線は宙を浮く。
（Ｏ・Ｌ）
燃え盛る炎。

○東脳外科病院・外観

○同・トイレ・中

典子、私服で一生懸命に掃除をしている。トイレ用たわしで便器をこすっている。かがんで。

ある程度、こすったところで、水を流し、ゴム手袋を外し、汗をぬぐう。

典子、立ち上がって溜息。

典子「ふう」

ピカピカに綺麗になった便器。最後に水を流す。

○同・調理部控室・中

畳の6畳間。

社交ダンスをしている澤田と村田。

手を組んで、右に左に踊っている。

入口付近に呆気に取られて見つめている典子。

澤田と村田、典子に気が付く。

澤田「あ！」
典子「澤田店長、村田さん、何してるんですか？」
澤田、照れ笑いして、
澤田「いやぁ、村田さんと柔道の話してたらさ、学生の頃　組み手取るとこんな風になったね、と……」
村田は、ムスッとしている。
典子「ああ……（うなずいて）」

○典子のイメージ・柔道場・中
柔道、組み手争いの画。二人の人間が、両手を取って右横にずれ、左横にずれるの繰り返し。さながらダンスのよう。

○東脳外科病院・調理部控室・中
澤田「そう、まさに『社交ダンス』でしょ⁉（笑って）」
典子「だからって、実際に始めなくても（笑って）」

もう一度、繰り返し、

典子「『社交ダンス』……、クックックッ（笑いが止まらない）……」

典子は、ずっと笑い続ける。かすかに目に涙が出る。

村田も、にわかに笑いだす。

村田「ぷっくっ、あははは……」

澤田「白河さん、今日は、お疲れ様。トイレとかのお掃除、大変だったでしょう？時間延長ごめんね？」

典子「いえ、ぜんぜん」

澤田「今日は、ほら　賄い、食べてって。僕たちが調理したやつさ。昼番の人が食べるやつだけど、上には内緒だよ？」

澤田、部屋の中央のちゃぶ台を指さす。ちゃぶ台には、小鉢に盛られた　一人につき5から6種類の料理とご飯とみそ汁が3人分配膳されている。おいしそうに湯気をたてて。

典子、思わず感激して、

典子「わぁ……」

と、一言。

澤田、村田、典子、ちゃぶ台の周りに座り、手を合わせて合掌。

澤田、村田、典子「いただきまーす」

三人仲良く食べ始める。澤田と村田は、がつがつと。典子、嬉しそうに味わって。

○同・厨房・中

タイトル「数日後」

中央に、長方形の調理台と、その手前控室側入口の側の台に６つの大小のコンロ。

２段づくりの作業台が、調理台から少し離れて左隣にあり、間は人一人が通れるくらい空いている。

作業台は、調理台から見て、Ｔ字に配置されている。

作業台から、さらに奥となりには、並

行して大きなクローゼットのような乾燥機。
壁際には、包丁収納乾燥機、ボウルなどを置くラック、洗面台。
壁変わって、釜のような湯せん機、揚げ機、作業台、炊飯台、シンク。
壁変わって、冷蔵庫、食器棚、ご飯などを盛る作業台、器を洗う洗浄機。
壁変わって、大きなシンク。３階の病棟や職員食堂へ配膳車を上げるダムウェーター（エレベーター）。廊下へ出る出入口。
冷蔵庫や倉庫を挟んで、栄養課準備室兼事務所入り口。
壁変わって、また、シンクがあり、それらが厨房の設備。
廊下へ出る入口の上には時計。
厨房の中ほどの空いているところには、３台の黄色い配膳車がある。
配膳車の大きさは、幅１．２メートル、

奥行き1メートル、高さ1．2メートルほど。
両サイドに、中身を埃から守るスライドカーテンがある。
村田が、倉庫のドアから野菜や調味料の箱、調理用手袋や、ラップなどの備品類を大声をあげながら、倉庫の中から運んでいる。
村田「うおりゃー！うおりゃー！まだだー！まだまだー！」
中央の作業台の上には、トレーが並べられてある。
色は、薄ピンクと、黄色と、濃い緑の3種類。
作業台は、腰の高さの段と、その上の人の肩の高さに上の段があり、上の段には4枚横に並べるのが精いっぱい。
下の段には2列4枚ずつの8枚。
調理台、作業台の下には、それぞれ、引き戸や戸棚があって、器や調理器具

が収納してある。
それぞれのトレーは、このときはいいかげんに並べられている。
澤田が、コンロの前で鍋を掻きまわしている。
村田が、その斜め前の調理台で、きゅうりの薄切りを小気味よく始める。
エツと典子は、厨房内を小鉢をのせたトレーを2枚持って（1トレー9小鉢）、作業台の上の患者のトレーにセットしている。
エツ「白河さん！もうっ、いいかげんにやらないで‼アレルギーの患者さんと、普通の患者さんのトレーは、朝と同じところにってってんでしょ‼昼の並べるのも、朝と同じところにしなきゃいけないのよ‼」
典子「すみません‼」
エツ「早く！」
典子、急いで直そうとするが、全く見当がつかないで、うろちょろ。

小鉢を患者のトレーに配置するのに忙しいエツを振りかえり、
典子「すみません！わかりません‼」
エツ「もう！今度から覚えておいて‼」
典子、うなずき、
典子「（小さな声で）トレー、昼のを朝を同じところへ配置（と、メモをとる）」
メモを取り終えると、
典子「すみません、エツさん、次は何を……」
エツ「白河さん！真面目にやって‼そんなの昨日教えたでしょ⁉」
典子、うなずいて、しかし、あてもなくうろうろする。

○同・厨房・中
タイトル「次の日」
調理台の前に、澤田と典子が立っている。
目の前には、お惣菜の入った大きな鍋と（直径６０センチくらい）、お惣菜

を盛る、小鉢。

澤田「白河さん、今日は、『一口大』のこと教えるよ？」

典子「『一口大』？」

澤田「そう、患者さんの中で、大きいものを自分で食い分けられない患者さんのために、一口ずつの大きさに切って提供する」

典子「一口大に……」

澤田「うん、見てて」

澤田、調理ばさみを取り出して、里芋の煮っころがしを小鉢に盛ったまま、器用にハサミでチョキチョキと、一口の大きさに切り刻んでいく。

澤田「ちょんちょん、ちょんちょん」

里芋の煮っころがしは1．5から2センチの大きさに刻まれる。

典子、澤田の手元を覗き込む。

典子「ちょんちょん、ちょんちょん」

澤田「ね、白河さん、やってみて」

典子、小鉢を受け取って、里芋にはさ

みを入れる。

典子「ちょんちょん、ちょんちょん……」

煮っころがしが、転がってうまくいかない。なんとか、やり遂げると、

澤田「うん。これと、ミックスベジタブル大の『あら刻み』、米粒大の『刻み』、『刻み』にとろみをつけた『刻みとろみ』があるんだ。とりあえず、そこまで覚えて」

典子「はい」

典子は、メモを取る。

澤田「『刻み』と、『刻みとろみ』は、予備２つずつ作ってね」

典子、メモをとりながら、

典子「……なぜですか？」

澤田「うん？後から追加で入ってきた患者さんや、失敗したとき用だよ？」

典子「ああ、なるほど」

典子、メモを取りながら、何度もうなずく。

澤田「患者さんの食事の締め切りは１０時半

なんだよ」

典子「１０時半？」

澤田「そう、１０時半の食事箋受付で締め切られる。いつまでも、待ってはいられないからね」

典子「食事箋？」

澤田は、うなずき、栄養課兼事務所に行き、食事箋を持ってきて見せる。

澤田「これだよ？」

黄色い、Ｂ７くらいの大きさの薄い紙に、患者の名前と病状、アレルギー、提供食の形態（「刻み」、「刻みとろみ」など）が、書いてある。

澤田「これが『食事箋』。門外不出。患者さんの病状、アレルギーなどが一目でわかる。これが無いと。適切な食事が出せないんだ。アレルギーがあると危険だし、形態がわからないと、患者さんが食べられないものを出しちゃうかもしれない。絶対『これ』の情報いわないで。それに、これ持ち出した

ら懲戒くらいの大問題だから」
典子は、覗き込み、ゆっくりうなずく。
黄色い食事箋。

○同・厨房・入口
時計は、１１時半を指している。
典子、厨房に残っている澤田、村田、トヨに挨拶する。
典子「お先にあがりまーす！」
澤田、村田、トヨ「はーい！」
典子が、踵を返して帰ろうとすると、
村田、トヨ「あっ、待って、待って、のりちゃん」
典子、振り返る。
典子「の、のりちゃん？（嬉しそうに）」
トヨ「そう、のりちゃんよ？」
典子「あ、ありがとうございます」
典子、呆気にとられているが、頬は紅潮。
トヨ、透明なビニール袋２つに、種類

の違うお惣菜をそれぞれ入れたものを
掲げて、
トヨ「これ、持ってって、上には、内緒よ？
余ったお惣菜」
典子「え？いいんですか？」
トヨ「うん、食べて。苦手なものは無いわよ
ね？」
典子、ていねいにゆっくりと受け取り、
典子「（トヨの顔を見ながら）ありがとうご
ざいます……。こんなに、良くしていただ
いて……」
典子は、とても嬉しそうに２つの袋を
見つめる。
ビニール袋に入った、美味しそうなお
惣菜の袋２つ。

○白河家・外観（夜）

○同・居間・中（夜）
８畳ほどの和室に、中央、こたつ。

こたつの上に、漬物などの小鉢が、2，3ある。
白河圭吾（67）と、典子がこたつにあたって、待ち遠しそうに、奥の台所を見ている。
白河信子（65）が、お惣菜の器を2種類お盆にのせて持ってくる。
圭吾、典子、喚声をあげる。
典子「わぁー！」
圭吾「おお、すごいなぁ」
運ばれてきた食事を3人で、配置して
典子、圭吾、信子は両手を合わせ、
典子、圭吾、信子「いただきまーす！」
食事をとり始めた途端、圭吾、
圭吾「お！こりゃ美味い！典子はいつも、こんなもん作ってるのかい？」
典子「やだなぁ、これは調理師さんが作ってるのよ」
信子「典子は、盛り付けだけなのよね。お嫁にいけないわけだわ」

典子「お母さん！」
典子、頬をぷっとふくらまして怒る。
信子「調理師さんに、料理を習ってきたら？」
典子「その前に辞めちゃいそうだわ」
圭吾「なんだ、そんなに厳しいのか？」
典子「うん、厳しい先輩もいるのよ」
信子「大丈夫？典子」
典子「……」
典子、すこし、考え込んで、
典子「うん、大丈夫、多分」
典子、食事をぱくぱく食べる。
典子が、箸を向けた先に偶然、圭吾も箸を向け、お惣菜をとる。
典子「ああ！お父さん取ったぁ！」
圭吾「いいだろ、このくらい」
信子「お父さん！」
3人陽気に笑う。

○東脳外科病院・厨房・中
控室側の入口の戸に、張り紙がしてあ

る。

（張り紙の文字）「あごマスク　あんたの顔は　見たくない」

典子、呆気に取られて　その張り紙の文字を見ている。

典子「あ、これは、店長さんのこと……」

○典子のイメージ

澤田が、あごのところにマスクを止めてつけている。

○東脳外科病院・厨房・中

典子の後ろから、森川美津子（４２）が、声をかけて現れる。にこにこ笑っている。

美津子「のりちゃん、よくわかったわね」

典子「（すこし、びっくりして）わっ、森川さん！」

美津子「ふふふ、傑作でしょ？」

典子「あ、は、はい……」

典子、あわてふためいて返事する。

美津子「まったく、栄養士なのに事務もほかのパートの遅れもフォローしなくちゃならないから、大変よ。このくらい文句を言って、遊ぶしかないわ……」

美津子、大きく伸びとあくびをして、栄養課兼事務所にさがる。

典子「（小さな声で）なんか、たのしい……」

典子、美津子を見送る。

×　×　×

典子、配膳車をダムウェーターから下ろし、中の食器の乗ったトレーなどを水の張ったシンクにポイポイ投げ入れている。水には洗剤がはいっていて泡が立っている。シンク向こう側で、洗い作業をしているエツから、典子に怒号が飛ぶ。

エツ「白河さん！もっと急いで！」

典子「はい！」

（音楽）アニメ「エースをねらえ！」の音楽。（泣きたいときは、コートで泣けとー）

典子、仕事を急ぐ。

エツ「もっと、早く！」

典子「はい！」

エツ「もっと！」

典子「はい！」

典子の、額に汗がつたう。

村田「なぁ、店長。エツさん、少し厳しすぎでないかい？」

村田、エツと典子のほうをあごでしゃくりながら言う。

澤田、鍋を掻きまわしながら、

澤田「うん、……確かに遅いんだがね、……」

村田「ほかの新人が入ってきたときには、エツさん、こんな感じだったっけ？」

澤田「特別に、エツさん、白河さんに厳しいような気がするよ」

村田「ああ……」
そういうと、持ち場に戻る澤田と、村田。シンクのそばで、典子とエツは号令をかけあい、必死。
エツ「白河さん！もっと、急いで！さっさとやって！」
典子「はい……！」
典子は、トレーの投げ入れを続ける。

○同・病棟内３階・廊下
廊下で配膳車をひきずっている典子。
典子「お昼の配膳でーす」
患者たちは、部屋のベッドで待っている。中には、リクライニングで、ベッドを３０度くらい起こしている患者も。その中で、一人の老婆がじーっと典子を見ている。
典子「よろしくお願いしまーす」
介護士Ａ・介護士Ｂ「はーい」
介護士Ｂは、引き継いだ配膳車からト

レーを取り出し、運び出す。

介護士B「山下さーん」

典子、引き返し、廊下を渡り、階段に向かおうとすると、後ろから年を取った女性患者が追いかけてきて。声をかける。

患者「ねぇねぇ、お姉さん」

典子、気が付いて振り向く。

典子「はい。なんでしょうか？」

患者「これ……」

患者、手元からおりたたんだ折り紙を出す。

典子が、その折り紙に書いてある字を読んでみると、こう書いてある。

（いつも、美味しいお食事をありがとうございます）

典子、ぱっと笑顔になる。

典子「あ、ありがとうございます！」

典子、お辞儀をする。最敬礼。

患者「いつも、美味しいお食事をありがとう

ね。看護婦さんが、いつも厨房の方たちは暑い日も寒い日も熱い厨房の中で、一生懸命作ってるのよ？と、いうから……」

典子「はい……」

患者「残さず食べるように頑張っているの。いつも、ありがとうね」

典子、顔立ちが紅潮し、折り紙を見つめ、じっと佇んでいる。

○同・栄養課準備室・中

細長い部屋。

壁際に机が備え付けられてある。

机の上には、デスクトップコンピューター、その近くに内線電話が備え付けられている。

筆立てにボールペンなどの筆記用具。

美津子と、澤田が一冊の冊子を二人で覗き込んで話している。

美津子「この今年度のルールブック、絶対可笑しいわよね？」

澤田「確かになぁ、……これはなぁ」
美津子「これ、のりちゃんに見せてみる？（いたずらっ子ぽく）」
澤田「新人パートだからな、見せる？」
そこへ、食事箋を2，3枚持って典子が入ってくる。
典子「新しい食事箋、持ってきました」
美津子「あ、のりちゃん」
澤田、場所をあけて、
澤田「白河さん、今年度のわが社のルールブックが、できたんだ。見てみる？」
と、小さな冊子を渡す。
典子「あ、はい」
受け取り、開いてみる。
澤田「新人だからね、心して読み上げて（ニヤニヤしながら）」
典子「……守秘義務は、守りましょう。秘密厳守」
澤田「うん、それから？」
典子「……熱い調理器具があるので、取り扱

いに注意しましょう」

澤田「（ニヤニヤ）それから？」

典子「身の回りは清潔に」

澤田、美津子、うんうんとうなずいている。

典子「……包丁を持って走らない」

読み上げて、典子、一旦止まって、冊子に目を凝らす。目はまんまる。

典子「……え？」

澤田、美津子、耐えきれなくなって吹き出す。

×　×　×

（想像）厨房で、村田が包丁を持って澤田を追い回す。

村田「わー‼」

澤田「わー‼」

×　×　×

澤田、美津子、典子で笑っていると、
村田が入ってきて、
村田「なんだ？なんだ？」
と、問う。
澤田と、美津子で
澤田・美津子「これねぇ、これねぇ……」
突然、内線電話が鳴る。
（ルルル……ルルル……）
美津子、電話をとり、緊張感をもって、
美津子「はい、栄養課、森川です」
澤田と、典子、村田が美津子を見つめていると、
美津子「（声が裏返り）へ？今からですか？」
美津子、電話の受話器を持ち直し、澤田、村田、典子に向き直る。
美津子「（受話器を手で蓋をする）……どうしますか？今から一人、追加だそうです」
一同、お互いの意を探って顔を見合わせる。
典子、一点を見つめる。

×　　×　　×

（回想）患者が、笑顔で言う。

患者「いつも、ありがとう。頑張って食べてるのよ？」

×　　×　　×

典子、エプロンのポケットから、折り紙を取り出す。

（折り紙に）（いつも、美味しいお食事をありがとうございます。

典子、じーっと折り紙を見つめて、意を決したように、口を開く。

典子「食べさせてあげましょうよ……」

澤田、村田、美津子、驚いて典子に注目。

典子「食べさせてあげましょうよ、温かくて栄養のあるお食事……売店のじゃなくて、ちゃんと、栄養のあるお食事を！」

澤田、村田、美津子、３人お互いを見つめているが、
村田「お、おう……まだ、予備のがあるし、……！」
澤田「そうですね！頑張れば、間に合う！」
美津子「わたしも、カバーに入るわ！いっちょ、やったりましょう！」
澤田、村田、美津子、典子「おう！」
全員で、大声で号令をかける。それぞれが、目がキラキラしている。

○同・厨房・中
澤田、典子に声をかける。
澤田「白河さん！小鉢に副菜盛って！」
典子「はい！」
澤田「美津子さん！名札、早く用意して！」
美津子「わかっちょるわい！」
澤田「村田さん！ほらデザート、デザート！」
村田、デザートのパイナップルをタンタンタンと、勢いつけて切っている。

澤田「もう、そろそろ、配膳車だすよ⁉追加の人は⁉出来上がった⁉」
美津子「はい！ギリです‼」
典子が、配膳車に追加の患者のトレーを載せる。配膳車のカーテンを閉める。
村田、ダムウェーターの扉を開け。配膳車を載せる。
扉を閉めて、「3階」のボタンを押す。
澤田「オーケー‼」
全員ハイタッチ。
全員「やったー‼」
全員、喜びまわる。

○住宅街の坂道
自転車に乗って、典子が坂道を登ってくる。立ち漕ぎ。道路には逃げ水、すこしのかげろう。

○古岡クリニック・外観

○同・診察室・中

典子、古岡、机の傍で座っている。

古岡「最近、どうですか？」

典子「はい、大丈夫です」

古岡「……夜、眠れますか？」

典子「はい、パートをしているせいか、よく眠れます」

古岡「じゃ、聞きますよ？火は、見て怖くありませんか？」

典子「……はい、最近はまったく」

古岡「火を扱う職業ですから、心配していたのですが……」

古岡、カルテをペラペラとめくって、以前のページを見る。

古岡「あれから１０年ですね。早いものです」

典子「……はい」

古岡「このまま、何もないと　いいですね」

典子、にっこりうなずいて、

典子「はい」

典子、笑って見せる。

○東脳外科病院・外観（朝）

○同・調理部栄養課兼事務所（朝）

卓上デジタル時計が午前６時０３分を示している。

タイトル「４月１日」

○同・調理部・廊下（朝）

美津子と典子が、ユニホームに着替え、談笑しながら控室から出てくる。

美津子「だからねぇ、わたし、昨日、道路で４５０グラムの金塊を拾ったのよ」

典子「美津子さん、いくらわたしでも、それには引っ掛かりませんよ？今日は、エイプリルフールですよね？」

美津子「ダメかぁ……、のりちゃんなら、引っ掛かると思ったんだけどね」

典子「さすがに、それは（笑う）……」

美津子と、典子で笑い合っていると、栄養課兼事務所からの廊下（控室にも

通ず）に、澤田が、転がり込んでくる。

澤田「森川さん！白河さん！」

一枚のファックス用紙をぶら下げて、

必死の形相。

澤田「この病院から、わがニチエイ社、撤退です！」

典子、美津子が顔を見合わせて、澤田とお互いを交互に見ていると、

典子、美津子「はぁ⁉」

澤田「わが社この病院に縁を切られました‼」

典子「……」

美津子「……」

典子、美津子、口をぽかーんと開けて澤田を見て、典子と美津子もお互いを見る。

×　×　×

澤田が、ホワイトボードに図面を書いてこちらを向いて説明をしている。上

のほうに、横に広い楕円。中に「東脳外科病院」。下にもう一つ横に広い楕円、中に「ニチエイ社」と書いてある。

澤田「ここで、私が説明しましょう。病院の提供食は、たいてい外部の食事提供サービス会社に委託されます。病院側は、食事提供をお願いする契約主。食事サービス会社は、その食事を提供する雇われ側です。（２つの楕円をマーカーで指し示しながら）。この場合、東脳外科病院はお得意様。私たちは食事を出す雇われ側です。今、東脳外科病院は、うちと契約を切ろうと言うんですね。（矢印の途中に大きくバッテン）驚きです」

×　×　×

美津子「……は？そんなエイプリルフール、笑えないよ！」

典子「そうです！いくらなんでも、私でも、

ひっかかりません！」
澤田「違うのぉー！違うのぉー！（幼児がだだをこねるように）」
澤田、ファックスの用紙を振り上げて、
澤田「本社から、今　来たの！『ニチエイ社、東脳外科病院と契約打ち切り』ってファックスが‼」
典子、美津子「はぁ⁉」
澤田「契約切られんの！7月までに‼」
典子、美津子「ええー⁉」
典子「どうしてですか？どうして？」
美津子「なぜ？なぜ？」
澤田「ほかの会社が、うちの会社の予算より、安くできるから、って交渉したらしい。取られてしまったんだよ、この病院を」
典子、美津子「はぁ⁉」
澤田「ほんとに、『はぁ⁉』だよ。全く、ね」
澤田、ガクッとうなだれる。
3人、お互いを見つめる。
澤田、やっと口を開いて、

澤田「まぁ、とにかく、最後まで頑張ってやりましょう」
典子、美津子「……はい」
典子、下を向いたまま厨房へ向かう。
典子「（小さな声で）私たち、これからどうなるの？」
机のうえに、本社からのファックス用紙。

○同・控室・中
典子、澤田、村田、美津子が賄い料理を食べている。
澤田、ご飯を口にかきこみながら、
澤田「……また、トイレの掃除ありがとうね、白河さん」
典子「はい、どういたしまして」
澤田「ところで、なんだけど」
典子、村田、美津子に向かって、
澤田「皆、これからどうするの？」
美津子「わたしは、この会社のほかの事業所

へ行って栄養士を続けるわ」
澤田「そうだね、美津子さんのとこの近くに、うちの事業所あったっけ」
村田「俺は、わからん。この会社が好きで入ったんだが、俺の家から、ほかの事業所へ行くのは遠いんだ」
澤田「そか……。村田さんは、腕がいいから、うちの会社に来てくれるといいんだけどね。白河さんは？」
典子「私は、まだ考えてません。やっと仕事を覚えてきたところなのに、ほかのところで通用するかどうか。場所が違うと、全然仕事が違うと聞きました」
澤田「そうだよねぇ……」
澤田、箸を止めて、少し考える。
澤田「ちょっと、人事部長に聞いてみるね。ここに来る新会社に入れてくれるかもしれない。もう、トヨさんと、エツさんには、スカウトが来てるんだって」
典子、あんぐりと口を開ける。

その様子を見て、澤田、
澤田「この業界では、よくあることだよ？トヨさんもエツさんも、ここのノウハウよく知ってるし、実力があるからね」
典子「……（口をあんぐり開けたまま）」
澤田「白河さんも、ここの仕事覚えかけてるし、家も近いじゃん？」
典子「……それは、続けて働けたら、嬉しいですけど……」
澤田、スマホを取り出し、操作する。
（ピ、ピ、ピ）と、操作音がしたかと思うと、
澤田「あ、人事部長の尾坂さん？あ、東脳外科病院事業所の澤田です。今度の異動で白河さんのことなんですけど……、あ、さすが、お察しが早い。向こうの会社に話をつけてくださいませんか？あ、大丈夫？」
澤田、ニコニコと、典子に向き直る。
澤田「白河さん、大丈夫。人事部長が話をつけてくれるって。この世界では、ノウハウ

を少しでも知ってる人間は、貴重なんだ」
典子「（口をぽかーん、と開けて）……は、
はぁ……」
澤田「あとで、面接の話がくると思うよ？」
典子「はい」
澤田、村田、美津子、典子、一瞬置いて、一緒に溜息をつく。一緒にご飯を口にかきこむ。

○白河家・外観（夜）

○同・居間・中（夜）
圭吾、信子、典子がこたつを囲んで食事を始めている。
圭吾、びっくりした顔。
圭吾「ええ⁉ええー⁉」
典子「そうなのよ、お父さん」
圭吾「お前の会社が、病院から撤退⁉」
信子「ほんとなの？その話」
典子、しょんぼりとして、

典子「……うん」
圭吾「エイプリルフールじゃないのか？」
典子「それが、ホントのことらしいのよ」
圭吾「ああ……せっかく、典子が慣れてきたとこなのになぁ……」
信子「で、これから典子はどうなるの？仕事、せっかく始めたんだから、続けたいんでしょ？」
典子「うん。私、この仕事好きになってきてた」
圭吾・信子「……うん」
典子「店長さんの話では、私のこと人事部長さんにお願いして、新しい会社に入れてくれるらしいの。けど……」
信子「けど……？」
典子「けど、店長さんの経歴には、傷がつくんだって。それが可哀想で……」
信子「（うなずきながら）……ふうん」
典子、茶碗を持ちながら、
典子「私たち、スタッフの行き届かないとこ

ろもあったはずじゃない？なのに、パートは、スライドして残って、店長さんにだけ傷がつくなんて」

信子、お味噌汁を掻きまわし、口に流し込みながら、

信子「信子、割り切ることよ。世の中、皆、上手くいったら、誰も何も　そこから学べないわ」

典子が、茶碗を持つ手を止めて、信子をじーっと見ている。

典子「……私は、……」

典子、大きく一呼吸吸って、

典子「誰も、見捨てたくないの」

信子「典子……」

典子「誰も、見捨てたくないのよ……」

信子「まだ、忘れられないのね？」

典子、茶碗を持ったままで、ゆっくりとうなずく。

典子「見捨てられる人の気持ち、痛いほど分かるから」

圭吾、大きく息をついて、
圭吾「典子、なあ、典子」
信子、典子、黙って聞いている。
圭吾「……忘れて、先に進まないと、典子は不幸なままだよ？先に進んで、幸福になるんだ」
典子、うつむいたまま。
圭吾「忘れなさい。そして、未来に向かって進むんだ。幸せになる権利は、典子にもあるんだから」
典子、黙って聞いている。
圭吾「神様が、典子を生きさせた。その意味はきっとあるはずだから」
典子、涙ぐみながらも箸を進める。
圭吾、信子も、夕食を進める。
○東脳外科病院・外観（朝）
病院に朝陽がさしている。
小鳥の鳴き声。
○同・控室（朝）

典子が、着替えを終えて、本を読んでいる。
題名は「基本のビジネス書」
典子「うーん、……『仕事では、わかりやすく、しっかり意見を言いましょう』ふんふんふん、それから……」
しばらく、パラパラと本をめくってから、壁の時計を振り返り、
典子「あ、もう　こんな時間！」
立ち上がり、厨房へあたふたと向かう。

○同・厨房（朝）
トヨ、エツが洗浄のシンクの傍で、洗いものをしながら話している。
エツ「あの、鬼塚さんて介護の人、いつも配膳車、下ろしてくれないのよね！」
トヨ「そうなのよ。患者さんには、いい顔するのにね」
エツ「そうなのよ！この頃、患者さんが増えて大変なのに……」

典子、厨房へ入ってくる。
典子「おはようございまーす！」
澤田、村田、トヨ、エツ「おはよーう！」
典子「あれ？配膳車、まだ、降りてきてないんですか？」
トヨ「そうなのよ、困ったもんだわ」
澤田「白河さん、ちょっと下ろしてきてくれる？」
典子「はい！」
典子、階上に行くとき用の青いエプロンに着替えて、病棟へのドアから上に向かう。
澤田「よろしくねー」
澤田、鍋をかき回している。
村田、大根を切っている。
トヨ、エツは、シンクで鍋を洗っている。
○同・病棟内廊下・3階（朝）
典子、走らない程度に小走りに急いで廊下を歩いている。

廊下の正面から、一人の男性介護士。
名札に「鬼塚」。鬼塚浩（３５）だ。
典子「（つぶやく）あ、あの人が、鬼塚さんか……」

×　×　×

（回想）典子が、ビジネス書を読んでいる。
典子「うーん、……『仕事では、わかりやすく、しっかり意見をいいましょう』」
（回想終わり）

×　×　×

典子、生唾を飲み込んでうなずく。
典子「（小さな声で）ここぞ、本で読んだことを実践するとき」
典子は、一旦　立ち止まるが、意を決したように、鬼塚に向かって歩いてい

く。
鬼塚も、のりこが近づくにつれて　自分に用があるらしいことに気が付いて、典子を凝視する。
典子「（思い切って）鬼塚さんですね？」
鬼塚「（怪訝そうな顔で）……はい？」
典子「患者さん用の配膳車、ちゃんと下ろしてください」
鬼塚、とてもびっくりして、
鬼塚「……はぁ⁉」
典子の顔は、鬼塚を凝視している。

○同・厨房・中
澤田「白河さーん‼」
典子、首を思いっきりすくめる。
澤田「し・ら・か・わ・さーん（語尾に向かってどんどん声が大きくなる）」
典子、首をすくめて動けない。
澤田「病院側から、クレームがきたよ？」
澤田、息を切らし、

澤田「病院とここの会社は、雇い雇われの関係で、おんなじ会社じゃないんだ。病院側のスタッフ、つまり介護さんはお客様。その介護さんは、今までこちらの仕事の、配膳車を下ろしてくれるのを　ご厚意で手伝ってくださってたんだよ！」

典子、涙目になって聞いている。

澤田「『なのに、何だ！』って言われたよ⁉契約打ち切りが早まっちゃうかもしれない。それに、この忙しいのに、配膳車も、もう、下ろしてくれないって！」

典子、ひたすら下を向いておどおど。

澤田「白河さーん‼」

典子「はい‼」

典子、最敬礼のお辞儀をする。

典子「（お辞儀をしながら）すみませんでした‼」

典子、申し訳なさそうな表情。

澤田「もう、仕事増やさないで！」

澤田、ぷりぷりしながら、その場から

離れ、鍋のところへ行って、中身をかき混ぜる。
トヨも、エツも、村田も遠巻きにして冷たい目で見ている。
典子下ろしてきた配膳車を　キッチン雑巾で拭く。泣きそうな顔をしているが、こらえる。

○登り坂道（夕）
かげろうが立っている。
典子、とぼとぼと　自転車を引いている。
しょんぼりとして、けど、泣いてはいない。

○白河家・外観（夕）
典子、しょんぼりとして、門を開ける。
中に自転車を押し込む。

○同・門の内（夕）

自転車を引き入れて、スタンドを立て、
自転車にカギをかける典子。
玄関に向かう。

○同・玄関・中（夕）
典子、うつむいている。肩を落とし、
玄関の引き戸を開ける。
典子「（力なく）ただいまー」
信子「はーい」
信子、典子の声にすぐに応える。
奥から廊下をバタバタとやってくる。
信子、典子の元気ない様子を見て、び
っくりする。
信子「典子、何かあったの⁉」
典子、信子の声を聞いて　一瞬じっと
するが、たまらなくなって声を上げて
泣き出す。
典子「う、う、う、……」
信子「（驚いて）典子⁉」
典子「うあーん！」

信子「典子！一体、どうしたの⁉」
典子「うあーん……（泣き続ける）」
典子、靴を脱ぎ、玄関から上がって廊下に上る。

○同・廊下・玄関先（夕）
典子、廊下に上がると、信子に抱きつく。
信子「典子―っ！」
信子、一応受け止めるが、おろおろする。
典子、子供のように泣き続ける。
典子「うあーん！」
信子「典子―！」
信子、肩をさすったりして、典子をなだめ続ける。

○同・居間（夜）
圭吾、驚いた顔のアップ。居間には中心にこたつ。こたつに、突っ伏して典

子が、泣いている。
圭吾「ええ？えええー⁉」
信子「そうなのよ、そうらしいの」
圭吾「そんなことをしたのか？（呆れたように）」
典子、ひたすらシクシク泣いている。
圭吾、典子を責めるようではない風に、続ける。
圭吾「アホなことしたなぁ……」
典子「（泣きじゃくりながら）もっと、会社の仕組みを調べればよかったわ」
信子「最初、働けるだけでも喜んでたもんね……」
圭吾「社則を、調べるまでは、いってなかったからね」
典子「私は、バカなのよー！」
信子「そんなに、自分を責めないで……」
典子「けれど、会社の契約破棄が早まっちゃうかも」
信子「典子、そんな……」

典子「皆に、凄く悪いことしてしまった」
典子、しゃくりあげながら、
典子「皆、一生懸命やっているのに、一生懸命……」
典子、しゃくりあげながら泣き続け、
典子「店長さんの、経歴にも傷をつけて……」
信子「典子は、店長さん　好きだもんね」
典子「うん、人間として」
信子「いい人だもんね」
典子「面白くて、あったかくていい人」
信子「皆さんも、好きなのよね」
典子「そう、皆いい人」
信子「うん」
典子「社会のことも　教えてくれる、お米を残さない、患者さんのことを思ってきれいに盛り付けて、遅れそうなときは頼っていい、ひとりでやってるんじゃないんだから、って……」
圭吾、信子、うなずきながら、聞いている。

典子「皆、皆さん、いい人なのよー（涙声）」
信子、（よしよしと）典子をあやして、
信子「典子――!!」
圭吾、業を煮やして、
圭吾「ああ、ああ、わかったから」
典子「たまらないわ」
圭吾、信子「うんうん」
圭吾、はたと、気が付いたように、
圭吾「で、新会社にスライドの件は　どうなるんだい？」
典子「……あ、それ」
典子、しゃくりあげながら、
典子「……ダメになるかもね」
信子、びっくりして、
信子「店長さんに、言われたの？」
典子「ううん（否定）」
圭吾、信子、ほっとして、
信子「はっきり言われたわけではないのね？」
典子、しゃくりあげてうなずく。
圭吾、信子「それにしても、……」

典子が泣き続けている横で、
圭吾「大それたことしちゃったなぁ」
居間の中、３人が困り果てて途方に暮れている。典子は、しくしく泣いている。

○同・外観・居間の外から（夜）
窓の外から、中の白河家の様子が見える。圭吾と、信子が途方に暮れている。
典子が、ワンワン泣いている。
どこかの犬の鳴き声（ウウーン、ワンワン）。

○東脳外科病院・外観（朝）

○同・病棟・廊下（朝）
典子、配膳車を引いている。
典子「（声に力なく）朝ごはんでーす……」
介護士が、無言でそれを受け取って、
中のトレーを患者に配る。

介護士、チラチラと、典子を白い目で見ている。
典子、配膳車を引き渡すと、すこしうつむきながら、階段を下りていく。

○同・階段（朝）
典子、階段をしょんぼりしながら降りていく。

○同・厨房（朝）
典子、病棟の連絡口から厨房へ、うつむきながら入ってくる。
澤田、鍋をかき回していたが、典子に気が付いて、声をかける。
澤田「お帰りなさーい」
典子「ただ今戻りました」
澤田、以前の失敗はなにも気にしていないように、鍋をかき回し続ける。
典子「（モノローグ）なんにも聞かないのかしら？介護さんたちの様子……」

典子、曇った表情で、調理台に向かい、青い薄いビニールの手袋をはめ、置いてあった小鉢にお惣菜を盛り付け始める。

ひたすら、澤田は、鍋をかき回し、典子は、小鉢にお惣菜を盛り付け続ける、ダムウェーターの上の時計は、９時１０分。

時計を眺めた澤田は、あきらめの表情で、

澤田「もう、ダメだね、今日も配膳車、３台のうちの一台も帰ってこなかったね」

典子「……」

典子、申し訳なさそうに　澤田に向かってお辞儀をする。

○同・厨房・中（朝）

タイトル「その次の日」

典子が、盛り付けをし、澤田が鍋をかき回している。

ダムウェーターの扉が、何の変りもなく、そこにある。
タイトル「配膳車、返らず」

×　×　×

タイトル「その次の日」
典子、鍋を洗っている。
澤田、鍋をかき回している。
ダムウェーターの扉は、開かず。
タイトル「配膳車、返らず」

○同・病棟3階・廊下
典子が、一人、洗濯もののタオルや布巾を入れた籠を抱えて、歩いている。
正面から、掃除のおばさんが歩いてくる。
掃除婦「あ、のりちゃん」
典子「あ、おばさん」
掃除婦「久しぶりね、今日は信玄餅を持って

きたの。食べる？」
掃除婦は小さな包みを一つ典子に渡す。
典子「あ、おばさん、いつも　すみません」
典子、軽くお辞儀をして受け取る。
掃除婦と、典子、一緒に歩いて廊下の奥の洗濯室に向かう。

○同・洗濯室
引き戸を開けて、洗濯室に入ってくる掃除婦と典子。
洗濯室には、５台の洗濯機と一つのシンク。掃除用具や、洗濯の用具。モップや天井近くに吊るした洗濯紐。
掃除婦「今回、大変だったんだってね。上の人、カンカンだったんだって？」
典子、しょんぼりして、
典子「はい……」
掃除婦、洗濯物の雑巾を洗濯機に放り込みながら語り続ける。
掃除婦「でもねぇ、泣かなかったの偉いと思

うわよ？泣いてもどうにもならないからね」
典子「……だけど、あんな失敗をしたの、私だけだと思います。全く、私ったら……」
掃除婦、シンクで雑巾を洗う。
掃除婦「大丈夫よ？食事の提供に問題があったわけじゃないんでしょう？それさえ、しっかりしていれば……。人の命にかかわる仕事なんだから、それを、ちゃんとやってれば、いいんじゃない？」
典子「……はい」
掃除婦「だいたい、私も　配膳車を下ろすのは、介護さんの仕事かと思ってた」
典子「……」
掃除婦「これからよ。これからなんだから」
掃除婦、語りながら雑巾を洗い終えると、シンクを水を切った布巾で水滴を拭き取る。
典子、はっとした表情。
掃除婦「あ、これ？」
掃除婦、シンクの水を拭き取っている

作業に、
掃除婦「シンクの水を残さず拭き取ってるのよ？こうして、綺麗にしておくと、後の人が気持ちいいでしょ？」
典子「……そういえば、うちの母も、そう言ってました」
掃除婦「そうね、気持ちいいでしょ？（微笑みながら）」
典子「ここでは、忙しいから、職員食堂のシンク、朝の配膳のあと、拭かないんで行くんです。けど……」
典子は、うなずき、こぶしを握る。
典子「……なるほど……」
掃除婦「……はい？」
典子「おばさん、ありがとう。病院の人に、もう少し誠意を尽くしてみます！」
掃除婦「……え？」
典子、バタバタと洗面室から出ていく。

○同・厨房（朝）

タイトル「次の日」
鍋を回していた澤田が、典子に号令をかける。
澤田「白河さーん！配膳の時間です！上へ配膳に行って！」
典子「（元気に）はい！」
典子、病棟への入り口に掛けてある、青いエプロンに着け替えて病棟へ入っていく。
澤田、ダムウェーターに向かい、配膳車をダムウェーターに押し込み、「3階」のボタンを押す。
ダムウェーターが、上に上がっていく音。

○同・病棟階段（朝）
典子が、急いで3階へ駆けあがっていく。

○同・病棟3階・廊下（朝）

典子が、元気に配膳車を引く。

典子「朝食でーす！3階の皆さん、朝食でーす！」

介護士二人、びっくりするが、白い目。

典子は、気に掛けずに　介護士に挨拶。

典子「よろしくお願いします」

そういったかと思うと、社員食堂に下がる。

○同・社員食堂（朝）

典子、いそいそと食堂内へ入る。引き戸を閉める。

社員食堂内には、一角に　ラックや、電子コンロ、シンク、冷蔵庫などを置くスペースがあり、その空いている場所に、患者配膳車と同じ配膳車が一台置いてある。

典子は、その中から味噌汁の鍋を取り出し、備え付けの電子コンロにセットし、ご飯釜をシンクの横の台に置き、

ポットをその横に備える。夜勤職員用の食事トレーの箸やスプーン、名札を丁寧に備え終えると、この度はシンクの掃除に入る。
水滴のあったシンクを綺麗に雑巾で拭きとり、丁寧にその傍に雑巾をたたんで置くと、水滴のないのを確認し、大きくうなずく。
職員食堂から、引き戸を開けて典子は出ていき、戸を丁寧に閉める。

○同・厨房（朝）
病棟入口から、典子が入ってくる。
澤田が、鍋をかき回している。
典子「ただいま、戻りましたー」
澤田「遅―い！今日は、どうしたの⁉」
典子「……い、いえ、すみません、なんでもありません」
澤田「そ、そう？気をつけてね」
典子「はい」

典子、作業用のエプロンに付け替え、盛り付けの作業に入る。
時計、８時１０分を指す。
典子、盛り付けに取り掛かる。澤田、鍋をかき回している。
典子の目の前にあったお惣菜の小鉢が、一段に９つあるのが、一段、一段と盛られ、全部で７段の小鉢が盛られる。
時計、９時０３分を示す。
ダムウェーターは、静かなまま。
澤田、諦めたように顔を上げ、典子も諦めたように、
典子「店長さん、配膳車下ろしてきましょうか？」
澤田「うん、そうして」
典子、がっかりした表情で、病棟入口にむかい、青いエプロンをすると、病棟へ入っていく。

○タイトル「次の日」

○同・社員食堂（朝）
典子、また　丁寧に職員用トレーの箸やスプーンを揃え、シンクを前のように丁寧掃除し、水滴を拭き取り、雑巾を隣に丁寧に置く。

○同・厨房（朝）
典子、盛り付け。
澤田、鍋をかき回している。
。
時計、９時０５分。
澤田「白河さん、上　行って」
典子「はい」
典子、緑のエプロンを外し、青いエプロンをし、病棟入口へ。

○タイトル「次の日」

○同・社員食堂（朝）
典子、丁寧に箸やスプーンを揃え、シ

ンクの水気を拭き取る。

○同・病棟３階廊下（朝）

典子、社員食堂から出てきて、介護士Ａ、Ｂとすれ違う。

典子、自然な笑顔で、

典子「おはようございまう」

介護士Ａ、Ｂ「おはようございます」

典子、そのまま通り過ぎるが、介護士Ａ、Ｂは、通り過ぎていく典子を見送り、顔を見合わせる。

○同・厨房（朝）

典子が、いつものようにお惣菜の盛り付けをしている。

澤田も、黙々と鍋をかき回している。

時計は、８時４０分。

典子が、盛り付けに一生懸命手を動かす。ダムウェーターの音声アナウンスが聞こえる。

ダムウェーター音声「まもなく、３階からダムウェーターが下りてきます」

澤田、典子びっくりしてダムウェーターを見る。

澤田「え⁉」

ダムウェーターの電子表示盤が、３階から２階、１階へ。

ダムウェーター音声「ダムウェーターが１階へ下りてきました」

典子と、澤田、目を丸くして顔を見合わせる。

澤田・典子「え⁉」

典子、いそいそとダムウェーターのほうへ行き、扉を開けて、中の配膳車を引っ張り出す。

澤田、手を止めて、ダムウェーターのほうを振り返ったまま、

澤田「何が、起こったんだ⁉」

典子、急いでダムウェーターの扉を閉めると、「３階」のボタンを押す。

ダムウェーターの表示が「3階」で止まり、上のほうで、扉を開け、配膳車を入れるかすかな音がすると、
ダムウェーター音声「まもなく、3階からダムウェーターが下りてきます」
澤田「なんだってぇ⁉」
ダムウェーターは、配膳車を下ろしたあと、もう一回、上にあげると　職員の配膳車が下りてきた。
澤田「……これで、全部だよね？」
典子は、かすかに目が潤んでいて　今にも泣きそうだ。
澤田「白河さん、……なんか、やった？」
典子「……」
典子は、目を覆って泣き出し、言葉にならない。
澤田「なんか、やったんだね⁉それも、今度は良いほうに！」
澤田まで、声をあげて泣く。
澤田「（泣き声）おーいおいおい……」

二人、ずっと泣いてる。

○同・控室・中

澤田、村田、典子、エツ、美津子が、賄いを囲んで歓談している。

村田「（上機嫌で）それで、店長、特別に賄いをご褒美に？」

澤田「そ、そうなんだよ。こんなクリーンヒットは久しぶりだ」

美津子「しかし、やるわねぇ、のりちゃん。サービスの心を持ち合わせてるわね。よく、そこまでやったわ」

村田、ニコニコしながら、

村田「調理補助のパートが育つのはいい。だんだん一人前になっていく。しかも、のりちゃんが一人で気が付いたことなんだから」

エツだけ、一人静かに食べ続けている。

澤田「これで、病院側の心象も少しは変わるかな？契約切れまで、悪い印象が少しでもなくなればね」

村田「病院側の契約破棄は変わらないのか？」
美津子「ほかの会社より安くできないから」
澤田「そうなんだよねぇ」
エツ「……」
澤田「ま、いいさ。契約が切れるまで、一生懸命やろう」
村田、美津子、うなずく。
エツだけ、ただ　黙って食べ続けている。

○坂道
典子、坂道を登っていく。自転車を立ち漕ぎしている。

○白河家・外観（夕）

○同・居間（夕）
圭吾、こたつにあたっている。新聞を眺めながら。
信子、典子がその傍らに。

圭吾、身を乗り出して、
圭吾「ええー‼そんなことがあったの⁉」
信子「すごいじゃない！典子‼」
典子、照れたように肩をすくめて舌を出す。
典子「わたしだけの快挙じゃないわ」
圭吾「それにしてもねぇ……」
信子「典子、それで病院の人は　今の会社と契約続けてくれないの？」
典子「それが……」
典子、残念そうに唾を飲み込んで、
典子「契約終了には変わりはないんですって」
圭吾、信子「ううん……」
典子「ほかの会社が、安く仕上げてしかも、もう一品つけられるんですって。敵わない」
圭吾「無情だね……」
信子「なんだ、せっかく、典子たちのサービスがどんどん良くなっていってるのに」
圭吾「うーん……」
信子「いつか、病院側の人にも通じるといい

わね。典子たちの真心」
典子「うん」
圭吾「ただ、気を付けて」
信子「そう、気を付けて……」
典子、ゆっくりとうなずく。
圭吾「トラウマが、出てこないように」
典子の顔のアップ。
（O．L）燃え盛る炎。

○東脳外科病院・外観
タイトル「数日後」

○同・厨房・中
澤田、壁に備え付けの　内線電話を手に持ち、頭を抱えて大声を出している。
澤田「大変だー‼」
典子、村田、美津子、エツ、トヨ、澤田のほうを振り返る。
トヨ「なんなんだい⁉店長！」
店長のほかの一同、見守る。

澤田「急に、一口大が入った！」
典子「大丈夫です！」
澤田、村田、美津子、エツ、トヨ、驚いて典子のほうを振り返る。
典子「今日は、曇っていて天候が悪いので、どんどん新しい患者さんが入ると思ってました。普通食、指定食、一つずつ余分に作ってます。一口大、あります！」
澤田、村田「え？やってたの⁉」
典子「勝手にすみません」
澤田、村田「え？やってたの⁉」
典子「勝手にすみません」
澤田「いい、いいよ！ありがとう」
村田「のりちゃん、気が利くねー」
皆で、典子を囲んでいると、洗い場のほうにいたエツが、急に不機嫌な声をあげる。
エツ「いい加減にして！」
ほかの一同が、びっくりしてエツのほうを振り返ると、

エツ「あなたは幸せになっちゃいけないのよ」
澤田「え⁉」
　エツ以外の一同、びっくりしていると、
エツ「ひとの死体の上での、死にぞこないのくせに」
澤田、村田、美津子、トヨ「は⁉」
エツ「あなたなんか、死んだほうがよかったのよ‼」
澤田、村田、美津子、トヨ「え⁉」
　典子、目を大きく開けて　エツを見つめている。
エツ「私の怜と、海斗を返して‼」
トヨ「エツさんの、娘と孫かい⁉」
エツ「そうよ！１０年前の火事で死んだのよ！たった一人、白河さんを生き残して‼」
　典子、目を大きく見開き、手で口を覆い、驚愕の表情、息を大きく吸い、かすかに叫ぶ。
典子「なぜ、あの火事を！」
エツ「そうよ！怜と海斗を返して‼」

典子は、急に厨房から走り出る。
残ったスタッフは、ただ呆然。

○同・中庭
中央にベンチがある。
典子が、割烹着のままでふらふらと中庭に入ってきて、ベンチにそっと座りこむ。
顔を覆って、声もなく泣き続ける。
中庭の中央の柱時計が、１０時５０分を指している。
ひたすら、泣き続ける典子。

○同・病棟３階廊下
廊下を掃除婦が歩いていて、窓から何気なく外を見ると、典子が中庭のベンチでうつむいている。
掃除婦は、はっとして、階段のほうへ、いそいそと歩く。

○同・中庭

典子は、ひたすら泣いている。そこへ向かい、掃除婦が現れる。

掃除婦「のりちゃん」

典子、ハッと顔をあげる。

典子「おばさん……」

掃除婦「どうしたの？絶対泣かない子が……」

典子「私、忘れていた」

掃除婦、首をかしげる。

典子「私は、ほかの人を差し置いて一人で生き残ったんだった……」

掃除婦、怪訝そうな顔をしながらも、聞いている。

掃除婦「のりちゃん？」

典子「私が、なんでもなく生きているだけで、傷つくひとがいるんだった……それが、こんなに身近に」

掃除婦「のりちゃん、一体なんのこと？」

典子「私、……私……」

典子、泣きじゃくり続ける。

○タイトル「１０年前」

○街なか（夜）

空中から、街なかを望む。一角の雑居ビルで、炎が出、煙がもうもうと出ている。

映像は、その雑居ビルに近づいていく。

○雑居ビル（夜）

雑居ビル、火事に包まれている。

たくさんの消防車が、中規模の雑居ビルを取り囲んでいる。

あたりには、消火ホースや、消防士、救急車、野次馬がいる。

雑居ビルから、担架が一つ出てくる。

典子（２５）が乗っている。

消防士Ａ「助かったのか？」

消防士Ｂ「はい、瓦礫の下敷きになっていたんですが……」

消防士Ａ「まったく、無傷なんです」

消防士Ｂは、担架の典子を振り向き、
消防士Ｂ「……もしかしたら、神様が守ってくれたのかもな」
消防車や、救急車のサイレンの音が鳴り響く。典子、かすかに意識を取り戻す。消防士Ａが、典子に話しかける。
消防士Ａ「大丈夫だよ、助かったよ」
典子、聞こえていない。
典子「……誰も、助けてくれない」
典子、そのまま意識を失う。

○白河家・外観（夜）

○同・居間・中（夜）
今の固定電話で、電話中の典子。頭を時々下げながら、話している。
典子「すみません、店長さん、すみません」
店長（電話の声）「ほんとうに、もう、気を付けてね。どういう事情かしらないけど、職場を放棄しないで」

典子、ぺこぺこ頭を下げながら、

典子「本当に、すみません。木曜日は……」

店長「そう、木曜日は？」

典子「ちゃんと出ます。無断欠勤してすみません」

店長（電話の声）「大丈夫？それなら、いいけど。白河さん、頑張り屋だから、信じてるけどね？」

典子「ほんとに申し訳ございませんでした」

店長（電話の声）「あ、トヨさんに怒られちゃうから、あまり聞かないよ？でも、頑張ってね。くじけないで。人間生きてりゃ何かとあるから」

典子「は、はい。ありがとうございます……では」

典子、電話を切ると大きなため息をつく。

○同・典子の部屋（夜）

パジャマの典子が、ベッドにうつぶせ

に突っ伏している。悲しそうな表情。
典子「（小さな声で）……仕事、辞めよう。エツさんにどんな顔して会えばいいの？あの火事で、助かったのは私だけ、ってことは、エツさんの娘さんもお孫さんも苦しんで焼け死んじゃったんだ」

×　×　×

古岡のイメージ。
古岡、診察室の椅子に座って、典子に向かって話す。
古岡（イメージ）「白河さん、あの火事は、漏電だったそうだ。誰のせいでもないんだよ。なんで、君が苦しむんだい？」

×　×　×

典子「それでも、言われた。亡くなった人のご遺族から『一人で生き残りやがって』、

『しかも、無傷なんて信じられない』」

典子、泣いて鼻をすする。

典子「あの火事のとき、誰も助けに来てくれなかった。あの会社の人も、部長も、社長も。友達も。……気を失うまで、炎に追い囲まれても、誰も……怖かった」

典子、顔を覆う。

典子「一人で焼け死ぬのかと思った。たった一人で」

典子、ベッドの上に突っ伏して、枕をぎゅっと抱きしめる。

典子「……たった、一人で焼け死ぬのかと思った」

典子、枕に顔をうずめ、すすり泣く。

○同・階段下（夜）

階段下から、信子が、じーっと典子の部屋を見つめ、部屋から漏れる典子のすすり泣きを心配そうに聞いている。

頭を振って、

信子「……（頭を振って）なんにもしてやれないのよね……」

信子、溜息をつく。

○同・典子の部屋（早朝）

典子、ベッドの上で眠っている。

枕もとの目覚まし時計は、午前６時を指している。

遠くから聞こえる消防車のサイレンが大きくなっていく。

（ウー、ウー、ウー）

典子、寝ぼけ眼だが、音に気が付いて、びっくりし、あたりを見回す。

典子「あ、ここは……」

ぬいぐるみや、机、いすなどを見る。

典子「私の部屋だ。よかった」

消防車の音が聞こえるのに、ひどく怯えだし、

典子「どこかな？火事だ」

びくびくし、コートを羽織る。

階下から、階段を登る足音がパタパタとし、信子と、圭吾が登ってくる。
ドアをノックもせずに、信子と圭吾が現れ、典子を確認すると、きつく抱きしめる。
圭吾、信子「大丈夫だよ⁉典子！」
典子、喜んで　信子と、圭吾に抱き着く。
しばらくすると、
典子「どこ？火事」
信子「それが……」
典子「？」
信子「典子の病院のほうなのよ」
典子、表情が真っ青になり、手のひらで口を覆う。

○東脳外科病院・外観（早朝）
建物の一部から、煙がもうもうと立っている。
建物の近くの野次馬の中に、パジャマ

に外套を羽織った信子と典子がいる。

典子「厨房の方向だわ」

信子「あの辺なの？」

典子「うん、この時間だったら　店長さん、中にいるわ」

煙がもうもうと、立ち込める。

典子「誰も、誰も見捨てたくない！私と同じ想いを誰にもさせたくない！」

そういうや否や、典子は、人をかき分けて　建物の中へ入っていく。

信子「典子‼」

典子が、立ち込める煙の中に消えていく。

○同・厨房・中（早朝）

厨房の中は、煙や炎が上がっている。

典子、厨房の入り口から中に入っていく。

ポケットから、ハンカチを出し、口に当てる。中のほうに向かって声をかけ

る。

典子「店長さん！店長さん！」

誰の返事も聞こえない。

典子「店長さん！」

ただ、ただ、炎が燃え盛る。

てんぷらの揚げ機のほうで、人影が見える。澤田が、一生懸命、火を消そうと油用消火器を使っている。

典子「店長さん！」

澤田、典子に気が付いて振り向く。

澤田「白河さん！」

典子、その辺のバケツに水をいっぱい汲むと　頭からかぶる。澤田に近づいていく。

典子「店長さん！もう、ダメです！一緒に逃げましょう！」

澤田「くっそー！くっそー！僕はここで、１０年働いてきたんだ」

典子「店長さん！」

澤田「患者さんが、待ってるんだ‼」

典子「店長さん！」
澤田「……白河さん、君は　栄養課のほうへ行って、食事箋集めて逃げて！」
典子「店長！」
澤田「あれがないと、正確な食事が出せないんだ！」
典子「店長！」
澤田「食事箋を！」
典子「店長！」
澤田「早く！持って逃げて！」
典子「店長！」
澤田「早く！」
典子の後ろに、火が迫る。
そのもっと、後ろでも、瓦礫が落ち始める。
典子「店長……逃げてください」
澤田、表情硬く鬼気迫る表情で言う。
澤田「……行って……」
典子、涙を流し、澤田にすがるが、振り向いて、栄養課兼事務所に向かう。

○同・栄養課兼準備室・中（早朝）
厨房とつながる扉から、典子が入ってくる。部屋の中を探して、壁に吊るしたラックの食事箋の整理棚から、患者の食事箋を次々と抜き出し、保冷バックに詰める。
しかし、煙が充満してきて、咳が抑えきれなくなってくる。
典子「ゴホゴホ……」
煙で、視界が遮られ、典子の姿が見えなくなる。

○同・病院の外のエントランス（早朝）
エツが、ジャージ姿で、エントランス近くに姿を現す。
エツ「どうなってるの⁉これは、……」
入院患者たちが、看護婦や介護士に誘導されて次々に出てくる。エツ、介護士Ａを捕まえて、
エツ「どうなってるの⁉」

介護士Ａ「厨房から火が出たんです！」
エツ「厨房から？」
介護士Ｂ「今、二人くらいの調理師が、消火にやっきになってますが……」
エツ「え？誰？」
エツ、建物のほうを見つめる。
厨房のほうから、煙がもくもくと立っている。
エツ、厨房の通用口のほうへ向かう。

○同・厨房内（早朝）
煙の立つ入口に、エツのシルエットが映る。
厨房の入り口には、炎が寄ってきて、煙が立ち込める。その中をのぞいてうろうろするエツ。
エツ「誰かー！誰かいるのー⁉」
厨房内から、誰の返事も無い。
エツ、おそるおそる、厨房内に入りながら、

エツ「誰かー！」
エツ、ゴホゴホ、と咳をする。
厨房内は、煙と炎にほとんど満たされ、
視界はほとんどない。
焼け落ちた天井が落ちてくる。
すんでのところで避けるエツ。
途方に暮れて、あちこちを見回し、
口を開けて、絶望の表情、エツ。
また、何かが焼け落ちてきて　それを
避けて転ぶ。
エツ「誰かー！」
転んだまま、表情をゆがめて、エツは
口走る。
エツ「怜、海斗……」
火が、乾燥機や、コメの釜のほうを包
んでいる。
煙は、どんどん増えてくる。
転んだまま、エツは自分の右足の足首
を押さえて、表情は、時々ゆがむ。
エツ「う……」

足首を見て、
エツ「少し、挫いたかな」
足首が動くのを確認して、
エツ「このくらいなら、大丈夫だわ」
エツの目の前で、人影が動く。
エツ「だれか、そこにいるの⁉」
澤田「エツさん！」
エツ「店長！」
澤田「大丈夫ですか⁉」
エツ「私は……（大丈夫です、というように
うなずく）」
澤田「しかし、もう無理だ。逃げないと」
エツ、思い出して、表情を変え、
エツ「店長と、もう一人の人って……？」
澤田「白河さんだよ」
エツ「白河さん？」
澤田、栄養課のほうを見て、
澤田「栄養課へ行って、食事箋を持ち出して
もらってる。大丈夫かな……」
エツ「え……、私は、全然見てない……」

澤田、あたりを見回し、
澤田「栄養課へ行こう」
エツは、呆然として、
エツ「白河さん……私……」
火が、だんだん強くなり、ごうごうといい始める。
エツ「白河さんが、悪いんじゃない。八つ当たりしたままで終わるなんて、嫌よ」
エツの頬を涙が流れる。

○同・栄養課内（早朝）
煙が立ち込めている。
中で典子がしゃがみこんで、咳をしている。
むせて、苦しそう。
典子「出口は、……どこ？」
煙は、もうもう。

○雑居ビル・中・回想
２５歳の典子。火事の中で煙に巻かれ

ている。

典子「誰か……誰か……」

炎が近い。

典子「誰も、助けに来てくれない……」

瓦礫が、典子の上に崩れてくる。

典子「きゃあ」

○東脳外科病院・栄養課・中（早朝）

典子、しゃがみこんで、咳に耐えている。

典子「あの時と、同じ、誰も助けに来てくれない」

炎の勢い増す。

典子「こんどこそ、私……」

典子、あたりを見回す。

典子「なんとか、食事箋を……無事に……」

典子、見回す。

典子、せき込みながら、それでも活路を探そうとする。

うろうろと、周りを見回すが、道はみ

つからない。
途方に暮れた表情をするが、まだ　あきらめないで、道をすすむ。
炎は、どんどん、強くなる。
典子、とうとう、むせこんで倒れる。
煙が充満してくる。
遠くで、澤田、村田、トヨ、エツ、美津子の声がする。
澤田「白河さーん」
トヨ「のりちゃーん」
村田「おーい、白河」
美津子「のりちゃーん」
エツ「白河さーん」
典子、目をゆっくり閉じながら、
典子「……誰かが助けてくれる……」
煙が、流れ、典子の姿を包む。
（F・O）

○タイトル「一か月後」

○白河家・居間（朝）

信子が、小さなポットでお茶をカップに淹れている。

近くのこたつで、頭に包帯をした典子が、座っている。

信子「でも、すごかったわね」

典子、目をちょっと見開いて、信子の淹れたお茶を飲む。

信子「あのあと、無事残った食事箋？を使って、店長さんたち……」

典子、お茶を飲んで聞いている。

信子「一番ちかくの会社の事業所に頼んで、患者さんのお食事間に合わせたそうじゃない」

典子、じーっと信子を見ている。

信子「火事は、厨房内だけでおさまったから……」

信子は、急須を片付けながら、

信子「患者さんたちは治療が続けられて、事業所からは、助っ人さんがきて」

信子、典子に向き直り、
信子「典子、よかったわね。いい会社に入ったわね」
典子、黙ってうなずく。
信子「皆、助けてくれたじゃない」
信子、すこし、上を仰いで、
信子「火事の原因は患者さんが忍び込んで、火をいじっちゃったからだ、っていうけど……。店長さんも、責任を問われなくてすんだじゃない」
典子、口を開く。
典子「けど、契約はどうなるのかしら。あれから、連絡がきてないんですって。病院側からも、本社からも」
信子、うなずく。
信子「本来なら、あと一か月で病院との契約は解約になっちゃうけど、火事はニチエイの責任は、問われなかったし、食事を滞らせなかったのは、ニチエイのファインプレイでしょ？さすがに、契約終了は考え直す

わよね」

典子「そう、うまくいけばいいんだけどね」

信子、（ふーん）と、息をつき、肩をすくめる。

○東脳外科病院・外観

○同・応接室・外

扉に「応接室」の表札。

○同・中

奥の椅子に、病院の院長（６７）が、座っている。

その前に一列になって、澤田、村田、トヨ、エツ、美津子、典子が立ち並んでいる。

院長、立ち上がってうやうやしく、お辞儀をする。

院長「けがをなされた方も、完治なさったそうで……」

ニチエイ社員は、戸惑いながらお辞儀をする。

院長「今回の火事は、患者さんが、厨房に入り込んでの過失の火事だそうで……我々、介護の管理不十分でもあります……」

澤田「はぁ……」

院長「その後の連携プレーであなたがたは、たいへん良いことをしてくれた。患者さんの食事は、患者さんのいのちです。治っていく患者さんにはいのちのつなぎ。また、いのちのほのおが消えゆくかたには、おわりのだいじな食事になる。どれも、患者さんにとっては、……貴重なんです」

ニチエイ社員の一同、聞いている。

院長「そうなのです。だから、私たちは、あなたがたにお礼がしたい。患者さんの食事を滞りなく提供してくださり、とても、感謝してるのです」

ニチエイ社員の一同、目を見張る。

院長「食事のミスが、歴代一番少なかったの

は、実はあなた方なのです。それなのに、私たちは……お礼がしたい。御社との契約破棄は、撤回に！」

澤田「はっ⁉えっ⁉」

厨房の一同、顔を見合し、ざわざわ。

院長「それから、白河さん」

典子は、はっと顔を上げる。

院長「私は、聞いたのです。火事のトラウマがありながら、ブランクを経て、ちゃんと回復しましたね。立派に社会にリカバリーした」

典子は、下をむいて聞いている。

院長「お礼をさせてください。よくぞ、患者さんの生命線である、食事箋を守ってくださいました」

典子、（ふぅ）とため息をついて、

典子「そう、わたしは引きこもりだったんです」

典子以外の一同は、典子に注目する。

典子「ＰＴＳＤを、発症し、外にも出られな

くなった私は、ずっと社会に出て働くことが憧れでした。むかしのクラスメイトや皆と同じように……」

エツ、泣きそうになっている。

村田、下を向いている。

トヨ、美津子もうつむいている。

澤田「君は、一度も泣かなかった。大抵の子は、泣くのに」

トヨ「赤ちゃんみたいに、素直で」

村田「からかうと、面白かったよ」

美津子「遅れがちで、よく怒られても　決してあきらめなくて」

エツ「そして、私のしごきにも耐えたわ」

トヨ「なにかあったことはわかってたよ？」

典子「皆さん、……」

一同を見回した院長は、口を開く。

院長「皆さん、今後とも　わが病院とお付き合いください。素晴らしい会社ですね」

ニチエイ社員の一同は、お互いに顔を見合し、喚声をあげる。

澤田、村田、トヨ、エツ、美津子、典子「わぁー!!」

ニチエイ社員の一同は、抱き合って喜ぶ。

おわり